検査データによる褥瘡発生のリスク評価

○藤川　麻由美（天理医学技術学校），畑中　徳子，松村　充子，嶋田　昌司，山本　慶和
松尾　収二（天理よろづ相談所病院）

天理よろづ相談所病院では、臨床検査技師が創傷管理委員会・褥瘡対策チームに関わって約1年が経過した。

今回、褥瘡発生の高リスク患者についてその発生と検査データの関係を解析し、褥瘡発生のリスクを予測できるか否かを検討した。

[対象および方法]2003年7月～12月の6ヶ月間に入院した日常自立度判定Ｂ１以上を示した高リスク患者154例（発生36例、非発生118例）を対象に検査データおよびブレーデンスケール（ＢＳ）を用いて診療科毎に判別分析を行った。なお検査データはAlb、CHO、ChE、Hb、WBC、リンパ球数、CRPの７項目で、発生例は褥瘡発生時、非発生例は届出より２週間後のデータを用いた。

また、リスク予測の確かさの検証には、本年3月～５の間に入院した褥瘡発生高リスク患者224例（発生15例、非発生209例）を用い、的中率および陽性予測値で評価した。

[結果および考察]判別分析にて各診療科別に褥瘡発生のリスク予測式を作成し、その確かさを検証した結果、消化器内科、呼吸器内科、脳神経外科、腹部外科において的中率が58.3%～89.6%と有効な結果が得られた。循環器内科では、検査データによる判別のみでは、的中率が低かったが、ＢＳ１５以上を非発生とする条件を加えることで、81.0%と高い的中率を示した。しかし、血液内科では的中率が52.9%と低く、問題の残る結果となった。

血液内科を除く診療科を総合した結果、的中率75.3%、陽性予測値16.6%（有病率6.6%）、感度47.7%となり検査データが褥瘡発生のリスク予測に活用できる可能性が示唆された。また、発生者の判別値を経時的にみた場合、褥瘡発生の1週間前に検査依頼のあった10症例中、７症例が発生すると予測できる結果となった。検査データをもとに解析した褥瘡発生のリスクを即座に臨床へ発信することで、一早い対応が可能となり、集中した看護ケアなど、褥瘡発生予防に効果を発揮すると思われた。

[まとめ]検査データ、ＢＳを用いたリスク予測は、血液内科を除く全ての診療科で有効と思われ、今後褥瘡発生の予防に活用していける可能性が示唆された。

連絡先　0743-63-5611（内線8408）